

# 協働的な振り返り活動を通した 英語コミュニケーション能力育成の取り組み

梅本 陽翼<sup>\*1</sup>・山信 和也<sup>\*1</sup>・玉村恵理子<sup>\*1</sup>・中野 光彦<sup>\*2</sup>・  
高橋 俊章<sup>\*3</sup>・藤本 幸伸<sup>\*3</sup>・猫田 和明<sup>\*3</sup>

Fostering English Communication Skills Through Collaborative Reflective Activities

UMEMOTO Yosuke<sup>\*1</sup>, YAMASHINA Kazuya<sup>\*1</sup>, TAMAMURA Eriko<sup>\*1</sup>, NAKANO Mitsuhiro<sup>\*2</sup>,  
TAKAHASHI Toshiaki<sup>\*3</sup>, FUJIMOTO Yukinobu<sup>\*3</sup>, NEKODA Kazuaki<sup>\*3</sup>

(Received JULY 31, 2024)

キーワード：英語コミュニケーション能力、協働的な学び、振り返り活動

## はじめに

今年度のプロジェクトでは、協働的な振り返り活動を通したコミュニケーション能力の育成に焦点を当てて研究を行った。

小学校の実践では、「誰に、何を、何のために伝えるか」を児童に意識させ、異なる聴衆（山口大学の留学生とスペインの小学生）のためのプレゼンテーションの違いを振り返らせた。この方法で、児童は発言の内容を状況に応じてどのように変え、調整するかを学んだ。さらに、Padlet（動画などを配信できる掲示板アプリ）を利用して、交流先の相手から直接反応を得る体験を通じて、聞き手に対する意識を深める経験をした。

中学1年生の実践では、リテリングの能力向上を目的としてマンダラチャート（マス目があるチャート）を使用した。このチャートの中央にリテリングの主題となるキーワード（例えば「フィンランド」）を置き、練習を重ねるごとに、周囲のマスに関連する情報やアイデア、表現を記入させた。この方法により、生徒たちは自分のリテリングの内容、表現、話し方について振り返り、改善点を見つけることができるようになった。発表後に聞き手から「イイネ」のマークをもらうことで自己評価の習慣を育て、具体的な描写を用いて聞き手の興味や関心を高めるよう指導し、聞き手に響く発表ができるように指導した。

中学校2年生の実践においては、単元の前半で、生徒が教科書の内容を要約し、それに基づいて自分の意見を理由付きで主張する活動を行った。そして、単元の後半では、日本の音楽に興味がある留学生のリクエストに応える形で、生徒たちが留学生に自分たちのお勧めの曲を理由とともに紹介した。生徒たちはペアやクラス全体での協働的な振り返りを通じて、聞き手の興味を引く紹介の工夫や、論理的で説得力のある話し方について学び、多くの新たな気づきを得ることができた。

中学校3年生の実践においては、国語科の指導で用いられている「初発の感想」という方法を活用し、テキスト本文を読む前と後での意見の変化を生徒に意識させた。AIが友か敵かというテーマについて自分の意見を書くという単元の最終到達目標を達成するための準備として、ロボット掃除機、将棋ロボット、医療ロボットの題材を使い、3回のリテリングを行った。生徒は、リテリングをする度にマインドマップに重要なキーワードを書き加えていくことで、AIのテーマに関する知識を深めた。また、タブレットを活用して意見の根拠となる情報を検索したり、リテリングに必要な英語表現も確認した。その上で、表現の正しさよりも、話す内容に焦点を当てさせるため、即興的な反応が求められる口頭で、AIについてクラスメートと意見交換する機会を設定した。生徒は相手の反応や相手からの質問によって、話す内容や構成についての改善点に関する気づきを得ることができ、最終課題のライティング活動につなげることができた。

\*1 山口大学教育学部附属山口中学校 \*2 山口大学教育学部附属山口小学校 \*3 山口大学教育学部英語教育選修

## 1. プロジェクトの目的・方法

### 1-1 プロジェクトの目的

外国語の授業では、外国語を使ってコミュニケーションを行う能力の獲得を主な目標としている。本来、コミュニケーションを動機づけるものとして、自分の意見や気持ちを相手に伝えたいという思いや、相手の意見や気持ちを理解したいという思いが最初にある。それを踏まえれば、児童や生徒が自ら主体的に取り組みたくなるような場面や状況の設定、またはタスクの設定が行われていること、そしてコミュニケーションの目的が明確であることが不可欠である。

それらを前提として、外国語でコミュニケーションを行う際に児童や生徒が抱えている困難を克服できるようにするため、本プロジェクトでは、児童や生徒同士の協働による振り返りを通じて、各自の「気づき」を促すことで、児童や生徒が抱える英語学習上の困難を克服できるかどうかを実践を通して検証した。

### 1-2 プロジェクトの方法

小学校においては、タブレットを使用して山口大学の留学生とスペインの小学生との間で行ったプレゼンテーションを比較することにより、聞き手の知識や能力の違いに応じて子どもたち自身が話す内容や表現をどのように変化させているかを振り返らせた。

中学校1年生においては、コミュニケーション活動を試行錯誤しながら、協働的な振り返りを行い、どのような内容を、どのような表現で伝えるべきかについて気づかせるようにした。中学校2年生では、リテリングを行う際、どのような内容であれば聞き手がより興味を持つのか、または面白いと感じるのかについての気づきをクラスで振り返らせた。中学校3年生では、社会的なテーマに関するライティングを行う前に、アイデアを整理する時間を設け、自分で話の構成を振り返らせたり、テーマについてペアで話し合い、相手の反応や質問を通じて、話す内容や表現について改善が必要な点に気づかせるようにした。

## 2. プロジェクトの実際とその成果

### 2-1 小学校での実践とその成果

(1) 外国語科における「つなぐもの」を豊かに働かせ、よりよいコミュニケーションを生み出すためのICT活用

外国語科では今年度、子どもたちが外国語のどの単元においても汎用的に生かせる「つなぐもの」として、「目的・場面・状況に応じたコミュニケーション」を設定している。子どもたちはどの単元においても、このつなぐものの具体である、「誰に・何を・何のために伝えるのか」を意識してコミュニケーション活動に取り組んできている。今回はその中でも「相手の状況」を明確にしつつ、それにより同一テーマでも、「伝える内容」を変えていくことで相手に自分の思いがより伝わる体験を通して、相手の状況に応じて自己の表現を考えていくよさに気付けることをねらいとした。そこで、「相手の状況に合わせて表現が変化した」ことをメタ認知する、相手の状況に合わせて表現を変えることのよさに迫るために、ICTを活用することとした。その具体としては、①自撮りで自他のコミュニケーションを記録していくこと、②アプリを通して他国の児童とつながりをもつこと、③より伝わりやすいように調べ学習をしたことを通して、プレゼンテーションを作成することの3つを設定した。以下にその取り組みの成果と見えてきた課題を示していく。

(2) 指導の実際及び成果と課題

#### ①自他のコミュニケーションをメタ認知するために

本実践では、山口市の魅力を世界に紹介することを目的にした言語活動を行った。その際、単元を進める中で、伝える相手を、山口大学の留学生→スペインの交流都市の小学生→学級の友達に変化させていった。そうすることで、文化や生活の異なる相手の状況に合わせて内容を考える状況を設定した。また、タブレットを活用して山口大学留学生、およびスペインの小学生とのプレゼンを記録することにより、子どもたちが自分たちの発表を振り返ることを可能にした。子どもたちは留学生にプレゼンをしていく際に、“eye contact” “clear voice” “smile” 「抑揚をつける」という非言語的な要素に目を向け、効果的なコミュニケーションにはこれらが重要であると気づくことができた。次に交流都市の小学生用に向けたプレゼンテーションと比較することで、「山口を少し知っている留学生」と「山口市を全く知らない交流都市の小学生」との

違いにより、自分たちの表現がどのように変化しているかに気づくことができました。そして、目的・場面・状況や聞き手の違いによって話し方を変えることの重要性を認識したことにより、相手意識をもってコミュニケーションを図っていく大切さを子どもたちが実感することができました。ただし、映像を見る際に教員側が明確に「視点」を与えておかないと子どもたち自身が映像の何をどう見取ればいいのか定まらないので、視点の共有が不可欠であることが明らかとなった。また、グループ内での気づきを全体で共有する時間が限られていたため、今後は活動の計画をさらに洗練させる必要があると感じた。

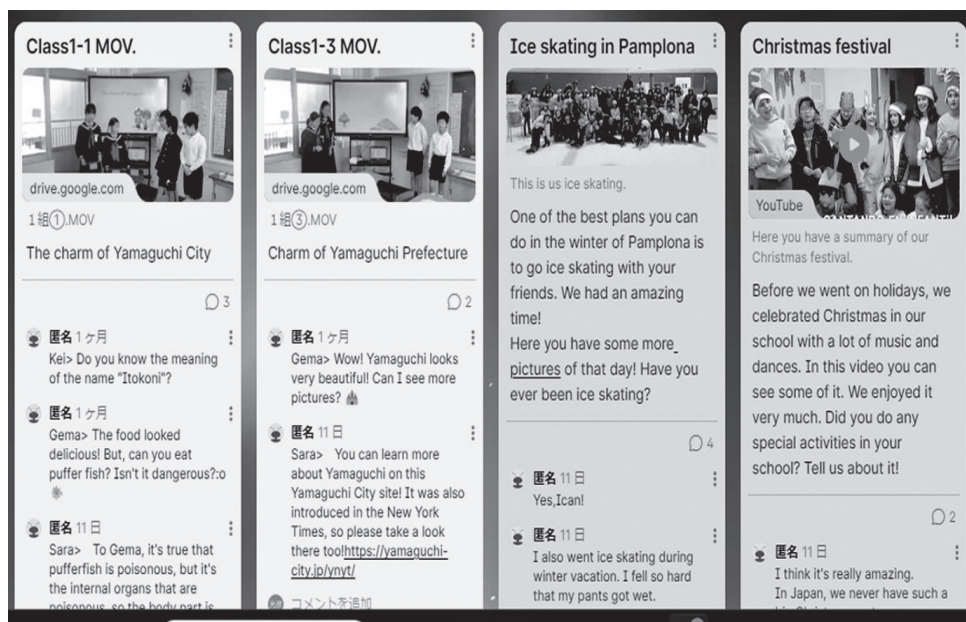
### ②他国の児童とつながりをもつために

今回の実践では、交流先の子どもたちからのレスポンスをいかに早く得るかが課題となった。実際昨年度も同じ交流先の子どもたちに対して学校紹介を行ったが、DVDでのやり取りだったため、返信があったのは新学年になってからであった。そこで今年は、パドレット (Padlet) を活用して、プレゼンに対する反応がすぐに得られるように工夫した。実際にはパドレットを介してのやりとりの開始が当初よりも遅れたが、実践から2か月後には反応を得ることができた。さらに、スペインのクリスマスの様子も知ることができた。やはり、即時の反応を得られることは子どもたちにとって非常に意義深いと感じた。今後も身近な話題を取り上げて互いにやりとりを続けることで、より深い交流につながり、子どもたちの国際的な視野が広がると期待している。

### ③より伝わりやすいように調べ学習を通して、プレゼンテーションを作成

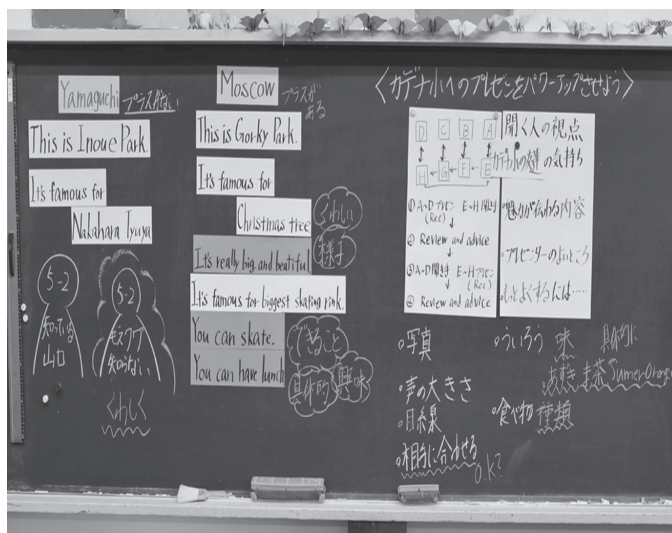
山口市の魅力を伝えるために、“It’s famous for～.”、“This is～.”といった表現、さらに形容詞を使った表現を加え、視覚的にも分かるようにスライドアプリなどを活用してプレゼンを行った。また、山口市の観光名所の特徴や郷土料理について調査する学習を並行して進めた。このとき、タブレットを使用することで、

これらの活動を効率よく進めることができた。これは英語表現の内容の広がりにも繋がっていたと思われる。ただ、詳細に伝えようとするほど、英語の表現が複雑になり、個人やグループでの表現向上には困難が伴ったため、もう少し内容に制限を設ける必要があったと感じる。また、表現が増えた際には、グループ全員で発話練習の時間を十分に取る必要があると考えられる。そうすることで、伝える内容の充実を図りつつ、新しい表現の理解と定着にもつながっていたかもしれない。



## 2-2 中学校1年生での実践とその成果

中学校1年生では、リテリング活動での発話量を増やすための実践を行った。教科書本文の内容をリテリングするだけでなく、本文の内容を理解しながら、自分で新たな知識や表現を習得していくことで、リテリングがより表現豊かなものになると仮定した。Program 9は、初めてリテリング活動が登場することから、中学校3年間を通して身につけさせたいリテリングの型を導入しやすい



タイミングであった。教科書本文の内容を覚えて、そのまま伝えても、聞き手は内容を知っており、コミュニケーション活動に新鮮さがない。そこで、単元を通して、自分で調べて得た知識を蓄積し、それをリテリング活動で活用すれば、聞き手の興味・関心は高まり、話し手の伝えたい意欲が増すと予想した。実践は以下の手順の通りである。

表 1 : Program 9 リテリングまでの実践計画

単元構成	リテリングに向けた指導内容
単元の導入	・フィンランドについて、教師によるプレゼンテーション ・リテリングというゴールを共有する
SCENES 1	文法理解・練習
SCENES 2	文法理解・練習
SCENES 3	文法理解・練習
Think 1 フィンランドの概要	本文内容の理解とセリフの行間を読む
Think 2 フィンランドの食べ物	本文の内容理解と登場人物の性格を考える
Think 3 フィンランドの日常	本文の内容理解とナラティブの方法を知る
Retell	毎時間の授業で習得したことをまとめ、リテリングをする

(1) 知識を増やすマンダラチャート

マス目のあるチャートは、「リテリングを成功する」という目標達成シートである。マス目のあるチャートに、教科書本文でリテリングに使いたいキーワードやフレーズを記入させた。さらに、iPad を使って、キーワードに関連する情報を深掘りして、記入させた。例えば、reindeer と書いた生徒は、Santa Claus とキーワードを付け足したり、iPad で調べてフィンランド人はトナカイを食べると知った生徒は“People eat it.” と付け加えたりした。同様に生徒たちは、“traditional food” や “We can buy it at a supermarket.” などの情報を書き加えた。級友と情報交換をする際は、自分が興味をもったことをチャートに新たに追加する時間も設けた。教科書本文に載っていない情報を付け足していく活動は、新たな知識を習得するため、意欲の向上につながった。

(2) 単元を貫くフレーズ

毎時間、単元を貫くフレーズを提示して、授業の終末に生徒に考えるように指導した。フレーズは、“Finland is a country of □.” である。授業を通して得た知識や表現を□に埋めて理由を考えさせ、学級で共有し、共感したフレーズはメモを取るようにした。これは、リテリングの導入で役に立つようにと仕掛けたものである。

Finland

Class: No. Name:

About Finland

		<b>Finland</b>		

(3) 登場人物の性格や様子の考察

フィンランドの国民的キャンディーであるサルミアッキをお土産として買った真央は、級友のダニエルと健に渡す際、ダニエルから、“Is it tasty?” と尋ねられる場面があった。真央は、“It’s a secret.” と返答した。この場面から、真央はどのような感情でこのセリフを言ったのか、3人の仲の良さはどれくらいなのかなど、学校生活の友達に置き換えて、性格分析を行った。その後、実際にセリフを演じて話させた。リテリングでは、“Mao gave Salmiakki to Daniel. She said, ‘It’s a secret.’ Mao is an interesting girl. I want to be a friend.” などと表現できた生徒もいた。つまり、教科書の対話文を自分でまとめるだけでなく、その状況の感想を自分なりに考えることができたということである。

(4) リテリングを行うためのタスク活動

「フィンランドの魅力を発信するインスタグラマーになろう」と題して、聞き手からリテリングの評価をもらえるようにした。話す際のポイントを示し、伝え方、内容、ジェスチャーをA、B、Cで評価し、全体総合評価をイネのマークを使って、3段階で表した。評価結果は、生徒に返し、伝わったかどうかのリフレクションを行った。マス目チャートを使いながら話すことから、初めはチャートを見ながら話していた生徒も、回数を重ねるごとに自分の口で話すようになった。中間指導として、数組の生徒に発表してもらい、質

問文を入れたり、相手のリアクションを求めるように話したりするなど、相手とのコミュニケーションを意識するように指導した。

#### (5) ストーリーをリテリングすることからナラティブへ

正しく事実を伝えることを学ぶと同時に、事実に自分たちの調べた知識を付け加えて自分のことのように話すことを、リテリングからナラティブの第1歩とした。ここでいうナラティブは、話し手自身がつま先出来事や経験から、学びや気づきがあるかどうかを示している。本文にあるフィンランド体験記を自分事のように話すために、iPadを使って、フィンランドに関する動画を視聴したり、資料を検索したりした。話し手は、「自分が実際に体験したつもりで話す」ために、様々な情報を調べるとともに、どのような感情をもつかも考えるように指導した。例えば、登場人物の真央がサウナを体験したことを本文で知ると、実際にフィンランドでサウナを体験した動画を見て、その時に思うセリフ“I took a sauna. Then I jumped into a lake. It was very cool.”を表現した。

### 2-3 中学校2年生での実践とその成果

#### (1) 授業実践 その1 「Our Project 5に向けた単元構成」

中学校2年生の教科書は、8つのProgramと3つのOur Project (④⑤⑥)を中心に構成されている。特に、Our Projectは1年次の①～③の続きとして、2年次では④～⑥の数字が設定されており、3年間を見通した構成となっている。今年度は、Our Projectに向けた単元の積み重ねを意識し、自己表現や対話を行ってきた。Our Project ⑤は、Program 4～6のまとめとして設定されており、人物紹介をゴールとし、3つのプログラムを以下のように組み立て、実践を行った。

Program 4 High-Tech Nature Small Talk: Who is your favorite person?

生物がもつ高度な技術が私たちの生活に生かされている例が紹介されている本文を理解し、本文を再構築する中でキーワードをもとに内容を要約し、さらに本文から学んだことや感じたことなどを1～2分程度加える英作文をさせた。そして単元末のリテリングでは、本文内容について写真やイラストを用いて説明したり、聞き手に問いかけたりするパフォーマンステストを実施した。

Program 5 Work Experience Small Talk: What do you want to be / to do in the future?

3人の登場人物が職場体験から学んだことを読み取らせ、さらに自分自身が考える「働くうえで大切なこと」についての英作文をさせた。英作文の内容は、①働くうえで何が大切か、②そう思う理由、の2点である。生徒は、職業を通して働くことは未体験であるが、学校生活において委員や係の仕事をする際に感じたことに基づいて作文したり、将来を想像して作文したりしていた。

Program 6 Live Life in True Harmony Small Talk: What is your favorite song?

音楽家のスティービー・ワンダーの作った曲やその曲にまつわるエピソードが紹介されており、自分のお気に入りの曲についてペアでやり取りすることから始めた。相手が思わず聞いてみたくなるような情報を伝えることを意識させ、どのような情報が曲の魅力や価値を伝えることにつながるか考えさせた。そこから、日本の音楽に興味を持っている外国人に対して、おすすめしたい日本の曲を考える活動を行い、単元末のリテリングでは、スティービー・ワンダーについて、曲を通して関わりのある人物についても触れながら紹介する活動を設定した。

Our Project ⑤ こんな人になりたい

#### (2) 授業実践 その2 「Program 6 対象の魅力や価値を伝える」

(1)では、Our Project ⑤に向けての単元構成について述べたが、ここではさらにProgram 6での実践の具体について述べていく。生徒は、これまでに身近な人物やものを紹介する活動を行ってきた。しかし、選んだ人物やものについて生き生きとした表情で語りながらも、主観的な考えに終始し、聞き手に興味をもたせるような工夫が十分ではないというもどかしさを感じていた。また、惹きつけられる発表にある共通点として、学んだ単語や表現のわかりやすさと興味を引く内容などを挙げていた。このことから、自分の伝えたいことが相手に伝わる喜びや達成感を味わいつつ、聞き手や読み手を引きつけるような内容面での工夫ができる生徒の姿を想像し、本単元を設定した。Program 6は、スティービー・ワンダーという人物を、彼の作った曲や所縁のある人物を交えて紹介する内容である。次に控える憧れの人物を紹介する活動を見据え、聞き手や読み手を引き付ける魅力を伝える活動を含む構成とした。外国人に実際におすすめするという場面や状

況を設定し、目的を明確にした課題に取り組ませることで、試行錯誤しながらも、自分の思いや考えを相手により分かりやすく伝えようとする子どもの姿につなげることができると考えた。

山口大学教育学部附属山口小・中学校では、「目的や場面、状況に応じた外国語でのコミュニケーション能力」を小学校と中学校でつなぐために以下の4点（①めざす方向性（育てたい生徒像）をつなぐ、②課題と自己を「つなぐ」、③授業の流れを「つなぐ」、④これからに「つなぐ」）に焦点を当て指導を行っている。

①では、「日本の音楽に興味を持っている外国人に対して、自分のおすすめしたい曲を選び紹介する」という目的や場面、状況を設定し、誰に対して何のために伝えるのかを目的意識を明確にした。また、相手意識を持たせどんな情報が必要か、子ども自身が考えさせる機会を与えるようにした。

②では、外国人の友人からビデオメッセージを受け取り、直接生徒にお願いをする場面設定をした。そうすることで、実在の人物に英語を用いて紹介するという必然性が生まれるようにした。

< Porschla からのメッセージの内容 >

Hi, everyone. I'm Porschla. I'm from Singapore. I'm very interested in Japanese pop culture. And I enjoy listening to music. Music really energizes me. I often listen to Japanese songs, and one of my favorite singers is Utada Hikaru. I think she has an amazing voice and a great personality. What about you? Who do you listen to? And do you have any good songs to recommend? Share with me so that I can get to know more about Japanese songs.

③では、ペアとのスモールトークの中で感じたもどかしさや、タスク活動の際に生じるエラーなどを中間指導により整えていきながら、子ども自身が試行錯誤して伝えたいことや表現したい内容を紡いでいくことをねらいとした。

④では、授業を通して気づいたことや課題を振り返らせることを通して、「できた」達成感を感じさせつつ、「できなかったことをできるようにになりたい」という向上心を言語化することをねらいとした。

本単元から、上記した①～④の視点を通して次のような生徒の姿が見られた。

(1) 目的意識の明確化と (2) タスク活動の必然性

生徒はビデオメッセージに興味をもち、どんな内容を話しているのか真剣に耳を傾けていた。実際に本物の動画を使用することで、相手が明確となり、また相手が求めているものに対して一生懸命に応えようとする生徒の姿が見られた。

(3) 試行錯誤できる授業構成とそれを支える中間指導

課題の提示後、教師によるモデルの提示を行った。以下は、生徒に示したマッピングと英文である。

I recommend a song "IDOL." It is sung by the musical duo YOASOBI. It is used in a Japanese anime. It has a nice tune and the vocal Ikura's voice is beautiful. You can watch the music video on YouTube. It was watched more than 300 million times.

『アイドル』という曲を話題の中心に据え、その曲の良さや、再生回数、アニメの主題歌として使われていることなどを述べている。再生回数などの客観的事実がその曲の人気度も示すことにもつながり、対象のもつ魅力や価値を高める情報にもなり得ると考えた。生徒は、モデル文も活用しながらおすすめ曲のマッピングを行い、ペアでの共有を経て最終的にはスプレッドシートに入力した。その際、生徒のもどかしさやつまづきを全体で共有し、中間指導で整えることでよりよい表現をめざした。



(4) 自己調整しながら粘り強く挑戦し続ける生徒の育成

スモールトークの際に振り返った内容からは、受け身表現を新たに取り入れた紹介を考えることで、受け身表現の有用性を感じた生徒も少なくなかった。さらに「相手を引き付ける情報を考え伝えることができた」や、「マッピングをもとに、原稿なしにこれだけの内容を伝えられるようになって自信がついた」というコメントが得られた。

## 2-4 中学校3年生での実践とその成果

本校の外国語科では「外国語を用いて、課題に向き合い、試行錯誤しながら、主体的に他者とかがわろうとする子どもの育成」を掲げて授業づくりに取り組んでいる。課題に向き合い試行錯誤するという部分は、困難を克服するというテーマと通ずるところがあると考え。

3年生では、教科書の各単元に設定されているテーマと関連付けて、教科書本文の内容を用いて自分の考えを述べる課題に取り組んできた。今回は、その中でも Program 7 での実践事例を取り上げ、生徒が最終課題に取り組めるようにするための手立てや工夫を単元構成の観点から紹介したい。

授業実践 “Is AI a Friend or an Enemy?” というテーマで、自分の考えをレポートにまとめる」

この単元は、3年教科書の最終単元である。この単元の特徴の1つは、単元名自体が問いになっているという点である。この問いに対して、自分なりの考えをレポートという形で表現することを最終課題とした。最終課題までの流れを考え、次のように単元を構成した。

(1) 単元の導入	1 時間
(2) 映画『I, ROBOT』の視聴	2 時間
(3) 言語材料 (仮定法) の導入と活用	3 時間
(4) 教科書本文の読み取りとリテリング	3 時間
(5) 意見の練り直しと口頭での意見交換	1 時間
(6) レポート (構想と作成)	2 時間
	計 12 時間

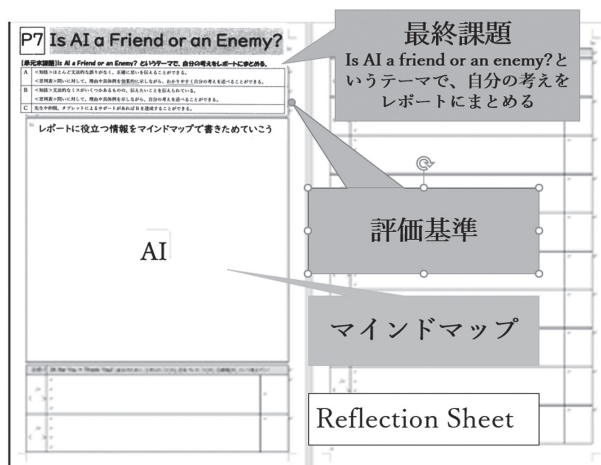
### (1) 単元の導入

単元最初の授業では、生徒がテーマに関心が持てるよう、AI に関するプレゼンを行った。その際のポイントは次のとおりである。

- ① 生徒の経験や知識とリンクするようやり取りを行う
- ② 教科書本文の内容を自然に織り交ぜて導入する

右に示している Reflection Sheet を配り、単元末課題 “Is AI a friend or an enemy?” というテーマで、自分の考えをレポートにまとめる) とその評価基準を共有した。左側中央の大きなスペースはマインドマップ欄として活用した。この授業内では、その時点での生徒の知識や考えを書かせ、今後の授業で新たな知識や考えが加わったらその都度アップデートしていくということを伝えた。また、振り返り欄には国語科の授業展開の1つ方法である「初発の感想」からの着想で、初回時点での自分の立場とその理由を書かせ、これがどう変化するかにも着目できるようにした。いくつか生徒の感想を紹介する。

図 1 : Reflection Sheet



- ・ 私は Friend 派です。AI は様々な場面で役立つから。人間に害を及ぼすのは使い手である人間次第だと思ふ。
- ・ Enemy だと思ふ。AI と聞くと少し怖いと感じる。便利な反面、人間味はなく、悪用例も耳にしているの。
- ・ 決められない。使う人によって変わるものだと思うし、現時点で AI との接点が少なく、よくわからない。
- ・ AI は道具である。友達とか敵とかいう考え方ではなく、家具などに搭載されているただの道具だと思ふ。

### (2) 映画『I, ROBOT』の視聴

映画『I, ROBOT』(2004年、20世紀フォックス映画配給、115分)を視聴する時間を設けた。この映画では、感情をもつロボットが人間と敵対したり、人間を救ったりするストーリーが描かれている。AIが友となるか敵となるか、生徒たちは考えを揺さぶられている様子であった。人間と敵対する場面が印象に残り「敵である」と主張する生徒がいる一方で、最終的に人間を救った様子を見て「友となりうる」と判断した生徒もいた。いずれにしても、問いに対して自分なりの考えをもとうとする姿が見られ、その点で映画が一役買ってくれたと感じた。

(3) 言語材料 (仮定法) の導入と活用

合計3時間の授業で仮定法を導入し、生徒が表現の幅を広げた。Small Talk や活用の場面では、AI やロボットと関連するトピック (ドラえもんやルンバなど) を取り入れ、最終課題につなげた。

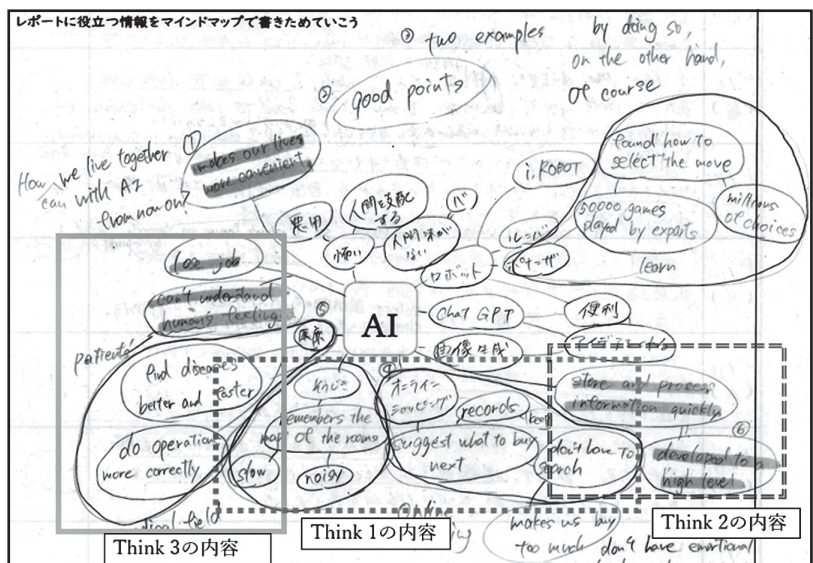
(4) 教科書本文の読み取りとリテリング

Think 1, Think 2, Think 3 それぞれのページに、AI に関する事例が盛り込まれている。生徒が必要に応じて教科書本文の内容をレポートに反映できるように、授業の終盤に自分の考えを含むリテリング活動を仕組み、インプットしたものを英語でアウトプットできるようトレーニングを行った。

- [1] 「ロボット掃除機またはオンラインショッピングと AI の関係と、それに関する自分の考えを英語で述べる」
- [2] 「将棋ロボット『ポナンザ』の強みについて説明し、それに関する自分の考えを英語で述べる」
- [3] 「医療現場における AI の良い点と悪い点の両面に触れ、それに関する自分の考えを英語で述べる」

一度ではうまく表現できないことを前提として、中間指導ののち、再挑戦する機会の確保に努めた。また、学習して得た知識や考えた内容をマインドマップに書き加える時間を設け、マインドマップをアップデートし続けた。右の例を見ると、最初の段階よりも、教科書本文を読んだ後のほうが AI に関する知識が増加していることがわかる。

図2: マインドマップの更新



<例>

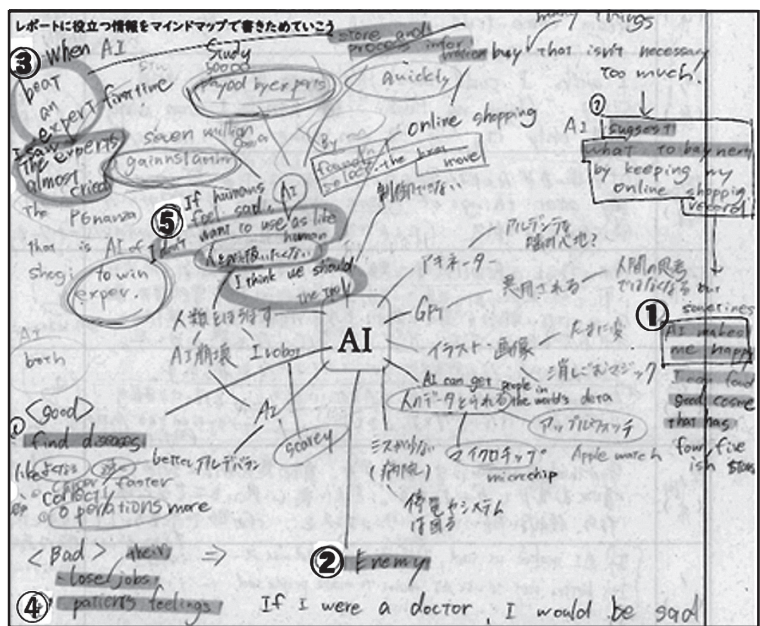
- suggest what to buy next (Think 1の内容)
- store and process information quickly (Think 2の内容)
- find diseases better and faster (Think 3の内容)
- can't understand humans' feelings (Think 3の内容)

(5) 意見の練り直しと口頭での意見交換  
改めて自分の考えを整理する時間を設けた。この時間では、マインドマップをさらに補強するためにタブレット端末を2つの点で活用した。

- ① この時間までに AI について気になったことなどを検索し、意見をサポートする追加情報を収集する。
- ② 言いたいことはあるが、英語でどう表現すればよいか悩むものについて、翻訳機能を用いて表現を探る。

翻訳機能については、昨年度から使い続けてきたこともあり、すべてを頼り切るのではなく、部分的に表現を調べたり、調べた中でも自分が理解しやすく使いやすい表現を選択したりすることができるようになってきた。

図3: マインドマップへのナンバリング記入



次に、口頭で意見交換する時間を設けた。いきなりレポートに書き起こすのではなく、自分の立場やその理由、論を展開していく構成が適切であるかなどを確認するためである。書くとなると細かい文法事項が気になってしまう一方で、話すのであれば言い直したり、相手のサポートを受けたりしてなんとか表現しよう



とすることができる。Speaking から Writing へ、つまり「言えるようになったことを書いてみる」という観点からも、この手順を踏むことにした。その際にもマインドマップを活用できるよう、ナンバリングを行った。構成を考え、伝えるべき内容を伝えるべき順に丸数字でメモをさせた。これにより、メモをもとに即興で表現するトレーニングを行うことができた。

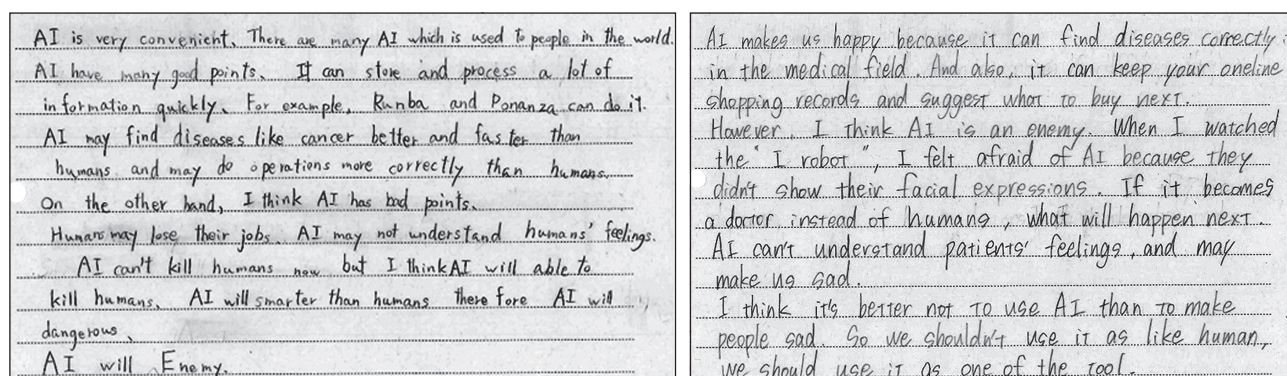
#### (6) レポートづくり

レポートを書くにあたり、教科書にある「わかりやすい文章を考えよう」というページを確認した。このページでは「つなぎ言葉」と「構成（導入、展開、まとめ）」について詳しく触れており、英文を書くにあたって参考になる情報が多く含まれていたためである。

レポート用紙には、押さえるべきポイントを5つ提示した。

- ①立場・主張を明確に示している。
- ②理由を述べる際に、具体例や実体験を入れて、具体的に語れている。
- ③「導入」「展開」「まとめ」の構成を考えた文章であり、「つなぎことば」が適切かつ効果的に使われている。構成や、つなぎことばについては、教科書の Step 4 (p. 72, 73) を参考にしよう。
- ④導入からまとめまで、内容の筋が通っている。(一貫性がある)
- ⑤ 30 語以上、100 語以内。上限は目安なので、超えても問題ありません。

実際に多くの生徒が制限いっぱいの 100 語近く（あるいは少しオーバーするくらい）自分の考えを書ききることができた。英語が苦手な生徒についても、教科書の表現を活用するなどして目標の 30 語以上書くことができていた。



左側は、初回の授業で「決められない。使う人によって変わるものだと思うし、現時点で AI との接点が少なく、よくわからない。」と感想に書いていた生徒のものである。助動詞 will のあとに be 動詞が抜けている部分が多く、文法的な課題は見られるものの、立場を定めて自分の考えを書くことができた。右側は、上に示したマインドマップを書いた生徒のものであり、この生徒は教科書本文に書かれていた医療現場における AI の活用事例が心に残ったことがうかがえる。

このように、「AI について 100 語のレポートを書く」という中学生にとって少し難しく感じてしまいそうな課題であっても、生徒は意欲的に立ち向かうことができた。次の 5 つを有効だった手立てとして挙げたい。

- ①そのゴールを達成できるような単元構成を組むこと
- ②テーマに興味を持ってもらえるよう、導入や授業展開を工夫すること
- ③スモールステップの手立てを用意すること
- ④学習の経過を Reflection Sheet で積み上げて可視化したこと
- ⑤情報収集や翻訳作業の際に、タブレット端末を効果的に活用したこと。

### 3. プロジェクトの評価

#### 3-1 小学校の実践に関する評価と今後の課題

今回の実践を通して、外国語の学習をより深くしていくためには ICT の活用は有効であると実感した。ただし、指導する側が明確に視点をもつことや、何をどう表現させていくのか、どう共有させていくのかを明確に、具体的に子どもの姿としてイメージしておくことが必要である。そうしなければ、広がりがあるぶん、

集約していくことが難しくなり結局学びの深まりが見いだせないことにもつながってしまう。本当の意味で ICT を子どもたちが効果的に活用できるために教材研究をしっかりと行いながら、より明確に単元計画、指導計画を練っていきたいと感じた。

### 3-2 中学校1年生の実践に関する評価と今後の課題

毎時間の活動の先に「リテリングをする」というゴールがあるからこそ、毎時間の授業ですべきことが明確になった。本実践では、リテリングの際、聞き手に興味・関心をもってもらえるために、わかりやすい情報を毎時間集めておかなければ、リテリングが成立しないというゴールの共有を単元の導入でできたことが、活動のスムーズさにつながったと実感した。また、知識や情報を蓄積するマンダラチャートは、生徒の思考を整理することができ、英語を話す上での手立てとなった。さらに、教科書本文の内容と自分で調べた情報が追加されたことで、リテリングの際に発話量が増え、豊かに表現できるようになった。このように、中学校1年生で身に付けた「リテリングの型」を2、3年生で発展できるように実践を積み重ねていきたい。

### 3-3 中学校2年生の実践に関する評価と今後の課題

生徒の学習を支援するものとして、英作文の補助としての翻訳アプリや、リテリングの録音や録画データの提出用に Google Classroom を使用した。リテリングをする際には、対面の他、録音や録画した単元もあり、マイクを各自が利用することで、一人一人の声が明瞭に記録されるようになった。データ化することにより、自分の発話を振り返ることで間違いやすいところに気付いたり、他者と共有したりすることも可能となった。最初はキーワードをもとに伝えるだけだった生徒が、原稿がない状態で、写真や絵をもとに内容構成を工夫しながら伝えるようになるなど、積み重ねから得られた成長の姿が見られた。ただし、生徒のパフォーマンスに関するデータの蓄積は増えたものの、それをどのように活用することで、生徒の能力や知識などの変容を効果的に把握することができるのかは分からず、今後の検討課題としたい。

### 3-4 中学校3年生の実践に関する評価と今後の課題

ゴールを達成するための単元をデザインし、テーマと言語材料をスモールステップで導入し展開した。学習の進捗を可視化して、生徒がコミュニケーション活動で直面する困難をある程度克服することができた。今後の課題として、生徒がコミュニケーション活動で感じる困難を克服するうえで、協働作業や ICT がどれだけ効果的かが検証できるような単元構成や授業展開を検討したい。

## おわりに

本研究では、小・中学生の英語コミュニケーション能力の育成を目的として、協働的な振り返り活動を通じた指導法を実践し、その効果を検証した。小学生には、異なる聞き手を想定したプレゼンテーション作成を通して、発話内容の調整能力を養う活動を行った。中学1年生では、リテリング活動を通じて、生徒が自らの発話内容や表現方法について振り返る機会を提供した。2年生には、自身の意見を英語で表現する力を養うための活動を、3年生では、AIに関する社会的テーマに基づくライティングとディスカッションを実施した。これらの活動を通じて、生徒は目的や場面に応じたコミュニケーション能力の向上に加え、協働的な振り返りを通じて自己の学習過程をメタ認知する能力の育成が見られた。今後の課題として、ICTの効果的な活用方法や、協働的な振り返りのさらなる工夫が挙げられるが、本研究は英語教育における振り返りの重要性を確認し、具体的な指導法の提案を行った点で意義がある。

## 付記

小学校の授業は2023年の11月21日（火）に実施、中学校1年生の授業は、2023年の12月4日（月）に、中学校2年生の授業は2023年の8月～11月の期間に、そして、3年生の授業は11月後半から12月に実施したものです。

なお、2-1から2-4はそれぞれ、中野、梅本、玉村、山信が執筆を担当し、1と3は高橋を中心に、藤本、猫田が執筆した。